

Title	アウラの消滅：オルダス・ハクスリー 『すばらしい新世界』
Sub Title	A loss of the aura : Aldous Huxley's "Brave new world"
Author	萩原, 眞一 (Hagiwara, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.37 (2001. 3) ,p.13- 36
JaLC DOI	
Abstract	<p>The aim of this paper is to demonstrate that Brave New World powerfully expresses Aldous Huxley's grave anxieties that Walter Benjamin's idea of the "aura" for the quality of uniqueness pos-essed by the individual will be obliterated by the reproductive process of standardized mass production. This paper first examines Huxley's radical vision of embryo culture, as portrayed in the opening section of the novel: Podsnap's Technique and Bokanovsky's Process. The former refers to the method of immensely accelerating the maturation of ova, ensuring the production of at least 150 within a two-year period. The latter utilizes X-rays to trigger the process of embryo budding, which produces up to 96 identical embryos. The combination of both technologies allows one ovary to yield an average of nearly four-teen thousand embryos in 150 batches of identical twins. In the Bottling Room, each bottled embryo is placed on a conveyor belt and manipulated both chemically and environmentally, until the fetuses are "decanted" on the 267th day. Secondly, this paper indicates the source of the scientific back-ground of Huxley's novel. An English physiologist-geneticist J. B.S. Haldane whose work is Daedalus, or Science and the Future may have exercised a direct influence on several important features of Huxley's future state. The very core of Daedalus is the potential effect of the practical applications of modern biology on human society. Ectogenesis, or gestation outside the body of a woman in an artificial womb, is one such biological invention. Here Haldane, under the disguise of a "rather stupid" Cambridge undergraduate of the 21st century, tells of the fantastic development of ectogenesis. He goes on to predict that the abolition of disease will make death a physiological event like sleep. It is evident that Haldane's image of ectogenesis is considered as a possible inspiration for Huxley's vision. Thirdly, special attention is paid to a most striking line in the opening passage of the novel: "Embryos are like photograph film." It means that the development of embryos bears a close parallel to the photographic development process in that each is best carried on under dim light. It is Susan Squire who can convince us of the link between the disappearance of the individual uniqueness produced by Huxley's audacious new inventions and the loss of the aura addressed in Benjamin's famous essay on the modern art. The French philosopher Jean Baudrillard is another important person who takes into consideration the connection between Benjamin's idea and a debased humanity resulting from human cloning. He points out the denaturing of the human body and calls into question the totalized notion of human being. "Technically and ideologically we are still a long way from bottled babies. But who knows what may not be happening?"-this is a passage from Huxley's foreword to Brave New World. To judge from the present situation of the reproductive revolution, it would be no exaggeration to say that we may be approaching the dystopian vision of the reproductive technology embodied so force-fully in Huxley's text.</p>
Notes	

Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20000930-0013">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20000930-0013</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アウラの消滅

——オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』——

萩原真一

## 1. 「顔は魂の通路だ」

〈壘の中の生命〉——この体外発生の鮮烈なヴィジョンを文学的な表現としてはじめてわれわれの脳髄に深く刻み付けることに成功したのは、オルダス・ハクスリー Aldous Huxley (1894-1963) の小説『すばらしい新世界』 *Brave New World* (1932) である。小説の舞台は未来の全体主義的な世界国家。そこでは最適の人口配置のモデルを氷山にもとめ、水面上の9分の1を占める最上位のアルファ階級と次位のベータ階級が、残り9分の8を占めるガンマ階級、デルタ階級、最下位のエプシロン階級を支配している。この徹底した階級社会を効率よく安定的に支配するための道具が、体外発生を可能にした生殖テクノロジーなのだ。

〈新世界〉では、人類誕生以来、連綿と行われてきた自然な生殖の営みは完全に否定されている。人間の子供は母親の胎内で一定期間成長してから、生まれてくるのではなく、体外受精を経て、人工的な壘の中で成育してから「出壘」“decant”するのである。そこには、男女の身体的な接触は介在せず、子宮という原空間もなく、ましてや愛とか恋といった人間的な感情など、みじんも存在しない。

この衝撃的な体外発生のヴィジョンは、小説刊行直後、物議をかもし、それを荒唐無稽な絵空事であると受け取める見解が多かった。そんな中、

体外発生の実現可能性を大胆に保証する評者がいた。それは著名な発生学者ジョセフ・ニーダム Joseph Needham である。小説の核心が先端テクノロジーを握った独裁者の絶対権力にあると見なすニーダムは、ハクスリーの予見する体外発生のヴィジョンに確固たる科学的根拠があると主張したのである。

.....*the biology is perfectly right*, and Mr. Huxley has included nothing in his book but what might be regarded as legitimate extrapolations from knowledge and power that we already have. Successful experiments are even now being made in the cultivation of small mammals in vitro, and one of the most horrible of Mr. Huxley's predictions, the production of numerous low-grade workers of precisely identical genetic constitution from one egg, is perfectly possible. Armadillos, parasitic insects, and even sea-urchins, if treated in the right way, do it now, and it is only a matter of time before it will be done with mammalian eggs (Needham's emphasis).<sup>1</sup>

ニーダムは、小型哺乳類の体外培養実験に成功していること、1つの卵から同じ遺伝構造をもつ人間を数多く作り出すことが「完全に可能」であることを指摘しながら、ハクスリーの作品には「われわれがすでに手にしている知識とパワーから論理的に推定されるもの」以外何も含まれていないと言明し、小説家の援用する「生物学は完璧に正しい」とお墨付きを与えたのである。

ニーダムの言及する多胎児生産技術は、食肉牛で現在使われる受精卵クローニングにほぼ相当する。受精卵クローニングは、①体外受精による受精卵を16から32の受精卵細胞に人工的に分裂・増殖させる、②受精卵細胞を、核を取り除いた別の未受精卵に1つずつ移植する、③核提供細胞と核

受け取り細胞を融合させ、分裂が開始したら、個別に代理母の子宮（将来は人工子宮）に移す、といったプロセスを経て、同じ遺伝組成をもつ個体を一挙に多数作り出す技術である。したがって、多胎児生産技術は、②の核移植のプロセスを経ないものの、その他の点ではほぼ受精卵クローニングと同じといえる。この受精卵クローニングを利用すると、理論的には一卵性32性児を誕生させることができる。このとき、32の個体のDNAは、両親のDNAとは相違するものの、個体同士は同じDNAを共有していることになるわけだ（ちなみに、体細胞クローニングは、①男女（雌雄）の生殖細胞同士の受精を不要にしたこと、②体細胞を提供する個体と同一のDNAをもつクローンを無限に生産できること、これらの点で受精卵クローニングとは異なる）。<sup>2</sup>

さて、いま特に注目しなければならないのは、受精卵クローニングが人間に応用された場合起こりうる事態を、ニーダムがいとも楽観的に考えていることである。

Many of us admit that as we walk along the street we dislike nine faces out of ten, but suppose that one of the nine were repeated sixty times. Of course, the inhabitants of Mr. Huxley's utopia were used to it.<sup>3</sup>

街を歩いていると、十中八九、嫌いな〈顔〉に出会う。しかし、同じ遺伝組成をもち同じ〈顔〉をした人間が多数出現することになると、嫌いな〈顔〉を「60回」も見かける可能性が出てくる。その嫌いな〈顔〉でも繰り返し拝んでいれば、「ハクスリー氏のユートピアの住人」と同様、いつのまにか「慣れっこ」になってしまうというわけだ。体外発生に関し当時の最先端の科学的知見を備えたニーダムが、突如、こうした楽天的で無邪気な見解を披露する場面に出くわすと、正直、その落差に思わず苦笑せざるを得ないのだが、他方、われわれの身体性の未来を考えると、彼の見

解には、単に一笑に付すわけにはいかない、何か重要な問題の糸口が提供されているのではないか、という気がしてくる。すなわち、同一者の増殖がもたらす〈顔〉の複数性は、ニーダムが楽観視するように、気軽に「慣れ」の問題に矮小化できるものではなく、何か深いところで人間の存在論的不安につながる契機をはらんでいるのではなからうか、と思われるのである。

もちろん、同じ遺伝情報をもつ個体が複数存在することになったとしても、環境要因が作用するため、それらは人格としてみれば、確実に異なる個体であり、お互いに他者である、という主張<sup>4</sup>があることは承知している。しかし、遺伝的に同じ個体が複数存在しても、人格的に異なるのだから、個人のアイデンティティは損なわれることがない、と納得できたとしても、同一の〈顔〉に「60回」も遭遇することは、どうしても「慣れ」の問題に還元できるものではなく、やはり人間のアイデンティティの在り方を否応なく変える可能性を秘めているように感じられて仕方がないのである。

「顔は魂の通路だ」——これは、安部公房の小説『他人の顔』において、登場人物のK氏が開陳する〈顔〉の哲学の一節である。液体空気の爆発で顔一面をケロイド状の癩痕でおおわれてしまった主人公「ぼく」は、〈顔〉の喪失が別に本質的なものの喪失ではありえないと強弁するのに対し、K氏は「人間の魂は、皮膚にある」と断言し、〈顔〉＝魂の直結性を主張するのである。<sup>5</sup>さらにK氏は〈顔〉のもう1つの機能を指摘する。それは、身分証明用の写真を例にとってみればわかるように、〈顔〉が個人を識別するための目に見える記号であるということである。こうして〈顔〉は、K氏によれば、可視な外面の露出する場であると同時に、不可視な内面の流出する場でもあるという点で、不思議に曖昧で両義的な場所とみなすことができるわけだ。とはいっても、〈顔〉をめぐるK氏の哲学談義に深入りするつもりはない。ここでは、同一の〈顔〉の氾濫が、とうてい「慣れ」の問題に帰着できるものではなく、むしろ〈顔〉というものに関わっ

て生きている人間という存在の本質に深く突き刺さってくることを確認できれば、それで十分なのである。

さて、以上を踏まえた上で、冒頭で提示したハクスリーの〈壘の中の生命〉のヴィジョンに戻ると、それが、受精卵クローニングと人工子宮を合体させた究極の体外発生のヴィジョンであることを了解できるはずだ。そこで拙論では、このハクスリーのヴィジョンを手がかりに、同一者の過剰が突きつける人間の〈アウラ〉(=唯一無二性)の崩壊に関して論じることにはしたい。

それにしても、ハクスリーのヴィジョンとは、いかなるものであろうか。ひとまず、小説に登場する人工孵化・条件反射センターを訪問してみよう。

## 2. 「科学の勝利」

人工孵化・条件反射センターは、「共有・均等・安定」“Community, Identity, Stability”<sup>6</sup> という〈新世界〉のモットーを実現すべく、2つの画期的な生殖テクノロジーを開発した。1つはポズナップ法、もう1つはボカノフスキー法である。

ポズナップ法は、卵の成熟過程を急速に促進する技術である。卵が毎月1つずつ排卵されるとすれば、仮に300個の卵が成長するのに25年近くかかってしまう。できるかぎり早急に人口を安定させることが、〈新世界〉の至上課題であるからには、四半世紀も費やして徐々に胎児を生産するなどという、悠長なことは避けなければならない。そこで、「2年以内に少なくとも150の成熟した卵」“at least a hundred and fifty mature eggs within two years”<sup>7</sup>を確実に得る方法が開発された。それがポズナップ法である。

ポズナップ法で採取された卵は、異常の有無の検査を受けた後、気孔に富んだ容器に個別に移される。この容器をスプーン状の液に浸す。液には1立方センチ当たり最少限10万の精子が浮遊している。10分後、容器を液中

から取り出し、受精の有無を確認する。受精卵は孵化器に移され、適宜、ボカノフスキー法によって処理される。

ボカノフスキー法は、ひとくちに言えば、受精卵の人工的な増殖・分裂により、最大96の受精卵細胞を培養する技術である。自然界では1卵から1胎児、1胎児から1成人が常態であるが、受精卵をボカノフスキー法で処理すると、1つの受精卵細胞から1胎児を誕生させることができるため、一挙に96人も一人前の成人を生産することができるのだ。このボカノフスキー法に関しては、前述したように、1930年代初頭においてすでに「完全に可能」であるとニーダムは太鼓判を押していた。

では、ポズナッフ法とボカノフスキー法を組み合わせると、いかなる結果が生じるであろうか。単純計算してみると、150（同一の卵巣に同一の男性の精子をかけ合わせてできた受精卵の数）×96（受精卵細胞の数）＝14,400（人）。1個の卵巣から、総勢1万人以上におよぶ、150群の一卵性の兄弟姉妹が誕生する勘定になるのだ。しかも2年以内で。まさに「自然に対するおそるべき改善」“a prodigious improvement on nature”<sup>8</sup>である。

大量出現する胎児は、順次、人工子宮の役目を果たす壇に移される。壇に必要な事項が転記されると、壇は即座に胎児貯蔵室に送られる。胎児貯蔵室の大きさは、長さ220メートル、幅200メートル、高さ10メートル。そこで壇は壇架の上にせられる。ベルト・コンベヤー上の壇架は、1時間33センチと3分の1の速度で動く。1日8メートルの割合で267日間移動すると、全行程は2,136メートル。壇架は1階を1周、2階を1周、3階を半周して、267日目の朝、出壇室で陽の目をみる。この胎児貯蔵室の光景は、「大量生産の原理が生物学に応用された」“The principle of mass production at last applied to biology”<sup>9</sup> ことを如実に物語っている。

大量生産といえば、1909年にヘンリー・フォード Henry Ford が開発した画期的な生産様式である。この生産様式が、労働の分業化による労働者の疎外という深刻な問題を生む一方、20世紀の産業に革命的な影響をおよ



ぼしたことは、周知の通りだ。いかに大量生産様式の発明が〈新世界〉にとって重要であったかは、1909年を紀元元年とするフォード暦を制定し、自動車王の功績を顕彰していることからうかがうことができるであろう(ちなみに、小説の時代設定はフォード暦632年である)。

胎児貯蔵室では、胎児に対して実にいろいろな操作が施される。第1に栄養補給。人工的血液循環システムの確立により、滋養豊富な血液代用液が胎盤上にたえず流入する一方、汚れた血液代用液は老廃物濾過装置を通過する仕組みになっている。胎児の貧血防止のため、豚の胃のエキスや馬の胎児の肝臓が補給される。さらに胎盤分泌液や甲状腺ホルモンによる胎児の刺激も行われる。第2に優生学的操作。基準に合格する卵巣は1,200のうち1つだけあれば所期の目的を達することができるため、女性胎児の場合、30パーセントだけを正常に育て、残り70パーセントに対しては男性ホルモンを投与し、妊娠能力を除去してしまう。また、被支配階級の胎児は応分の遺伝子と応分の環境をもつだけで十分という方針の下、階級が低ければ低いほど酸素の供給量を減らし、胎児の知能と体格を標準以下に抑えている。第3に条件反射教育。たとえば、熱帯地方の労働者になる予定の胎児に対しては、暑熱に対する嗜好と寒冷に対する恐怖をもつよう条件付けが行われるし、ロケット操縦者になる予定の胎児に対しては、平衡感覚を養うよう壘がたえず回転されるのである。

「なんというすばらしい新世界」“what a brave new world”——大量生産様式と生殖テクノロジーの結託が、一見、バラ色のユートピア社会を現出させたかのようにみえたが、その内実は、あらゆる変化を拒む、「安定」第一の抑圧的なディストピアであったという皮肉。ハクスリー自身は小説の中で声高に〈新世界〉を攻撃する言辞を弄してはいないが、シェイクスピア William Shakespeare の『あらし』*Tempest* の一節(5幕1場)からとられた小説の題名には、痛烈な皮肉が巧妙に仕掛けられているのである。

### 3. 「倒錯」

それにしても、なぜハクスリーが「完璧に正しい」生物学の知識に通暁できたのであろうか。この疑問は彼の家系を探ると氷解するはずだ。

そもそもハクスリーは、「ダーウィンの番犬」といわれた進化論の擁護者 T. E. ハクスリー T. E. Huxley を祖父に、生物学者レナード・ハクスリー Leonard Huxley を父に、そして同じく生物学者ジュリアン・ハクスリー Julian Huxley を兄にもつ、科学者一族の出であった。当初、彼自身も医者か生物学者を志していたが、イートン校在学中の16歳の折、重い眼病にかかり、右眼の機能をほとんど喪失したため、科学者への道を断念しなければならなくなった。しかし、科学に対する興味を失うことはなく、とりわけ、生物学が人間や社会におよぼす影響を考察することが、終生変わらぬ関心事となったのだ。そんな彼だからこそ、1930年代初頭において、既存の「知識とパワー」を活かして生物学の可能性を「論理的に推定」できたとしても、何ら驚くべきことではないのである。

ハクスリーが体外発生のヴィジョンを構想する上で特に依拠した「知識とパワー」の1つとして、英国の生理学者・遺伝学者ホールデイン J. B. S. Haldane (1892-1964) の啓蒙書『ダイダロス、あるいは科学と未来』*Daedalus, or Science and the Future* (1923) を挙げるができる——「〈新世界〉の受胎調節と死の制御のあらまはは、明らかに、すでに『ダイダロス』中に存在する」。“The outlines of the new world’s birth and death control, it is evident, already exist in *Daedalus*.”<sup>10</sup>

『ダイダロス』は、ホールデインがケンブリッジ大学在学中に発表したエッセイ「科学の未来」“The Future of Science”に補筆修正を加えた後、〈現代・未来〉叢書の第1巻として刊行された。この叢書の目的は、当時の最も著名な英国の思想家、科学者、哲学者、医師、芸術家が、生命の諸分野に関し最先端の刺激的考察を提供することであった。『ダイダロス』が

出版されるや、その挑発的な体外発生のヴィジョンはセンセーションを巻き起こし、後続の叢書は体外発生のヴィジョンをめぐる一大論争の場と化した感がある<sup>11</sup>。

ダイダロスは、いうまでもなく、反自然的な発明を数多く手がけたギリシャ神話の天才的工人である。甥殺しのため故郷アテネを追われ、クレタ島のミノス王のもとに逃れたダイダロスは、ある時、多淫な王妃パーシパエーの求めに応じ、牝牛の皮を縫いつけた、車輪付きの木製の牛を作る。この性交機械の中に入った王妃が、精力絶倫の牡牛と交わり、その結果、人身牛頭のハイブリッドな怪物ミノタウロスを生んだといわれている。ホールデインは、異種交雑による怪物造成の手助けをした、このダイダロスこそ「最初の近代人」“the first modern man”<sup>12</sup>であり、もし諸条件が整っていたならば、遺伝学の祖メンデル Gregor Johann Mendel の発見を先取りしていたかもしれないとまで絶賛し、生物学的制御の可能性を予見した自著のタイトルに工人の名前を使用したのである。

ホールデインは、生物学が物理・化学から自然科学界の王座を奪う篡奪劇を、プロメテウス（「物理学・化学の発明家」“the chemical or physical inventor”<sup>13</sup>）に対するダイダロス（「生物遺伝学」“biological genetics”<sup>14</sup>の徒）の勝利と見なした上で、生物学の潜在的能力をこう要約している。

There is no great invention, from fire to flying, which has not been hailed as an insult to some god. But if every physical and chemical invention is a blasphemy, every biological invention is a perversion.<sup>15</sup>

「神への冒瀆」対「倒錯」——ホールデインのこの対比的な措辞は、物理学的・化学的な発明が単に人間の侵犯的な越境行為であるのに対し、生物学的な発見がそうしたレヴェルをはるかに越え、人間存在の有り様を根底

からひっくり返すものであることを、いみじくも表現しているのである。そしてホールデインは、体外発生の分野における生物学的な「倒錯」に関し、21世紀後半に生きる「かなりできの悪い大学生」“a rather stupid undergraduate member”<sup>16</sup>を狂言回しに使い、彼にこう回顧させている。

It was in 1951 that Dupont and Schwarz produced the first ectogenetic child. As early as 1901 Heape had transferred embryo rabbits from one female to another, in 1925 Haldane had grown embryonic rats in serum for ten days, but had failed to carry the process to its conclusion, and it was not till 1940 that Clark succeeded with the pig, using Kehlmann's solution as medium. Dupont and Schwarz obtained a fresh ovary from a woman who was the victim of an aeroplane accident, and kept it living in their medium for five years. They obtained several eggs from it and fertilized them successfully, but the problem of the nutrition and support of the embryo was more difficult, and was only solved in the fourth year.<sup>17</sup>

架空の体外発生の歴史をおさらいしておくと、ある雌のウサギの胚を別の雌のウサギに移植（1901）→ネズミの胚を10日間、漿液中で培養（1925）→ブタの胚をケルマン溶液中で培養（1940）→卵巣を5年間、保存液中で生存させ、そこから採取した数個の卵を体外受精（1946）→体外発生（1951）、ということになる。ホールデインは体外発生の成功を20世紀半ばに想定したが、これはどう考えてもかなり早すぎる。というのは、体外受精胚移植による世界最初の「試験管ベビー」、ルイズ・ブラウンの誕生が、いまから20年あまり前の1978年であり、さらに人工子宮の実用化となると、今から数十年先のことと予測されているからだ。

「大学生」によると、体外発生成功のニュースは全世界に前代未聞のセ

ンセーションを呼び起こし、宗教界からは猛烈な反発を受けた。しかし、出生率低下に悩む文明国は渡りに船とばかり、すぐさまこの技術に飛びついた。まず最初に体外発生技術を公式に採用したのはフランスである。1968年までに年間60,000人の体外発生児が誕生した。21世紀後半の英国では、自然な生殖の営みから生まれる子供の数は30パーセント未満、残りすべては体外発生技術により誕生するという。

As we know ectogenesis is now universal, and in this country less than 30 per cent of children are now born of woman.<sup>18</sup>

ホールデインは、生殖テクノロジー以外の諸分野、たとえば生理学、内分泌学、薬理学においても非常に楽観的な展望を披瀝している。彼が思い描く生物学的ユートピアにおいては、人間は体外発生により誕生し、さまざまな薬品や健康食品の恩恵に浴して快適な人生を送り、最後は穏かで苦しみのない死を迎えるのである。

もうすでにおわかりのように、ホールデインの『ダイダロス』が陽画だとすれば、ハクスリーの『すばらしい新世界』はその陰画にあたる。ハクスリーの目論見は、ホールデインの夢想した生物学的ユートピアを転用しながら、そっくりそのままベクトルを逆転させ、それを戯画的に風刺することにあつたのだ。ホールデインとハクスリーは、生物学が人間の生命を一変させる大きな力を秘めているという認識では一致していたものの、この生物学的制御に関し、前者は人間の優生学的な改良に利用しようと楽観的に考えていたのに対し、後者はそれが「何の役に立つのか」と根本的に問い直し、その破壊的な可能性を危惧したのである。

#### 4. 「胎児は写真のフィルムのようなだ」

「胎児は写真のフィルムのようなだ」“Embryos are like photograph

film”<sup>19</sup>——これは、人工孵化・条件反射センターの研究員が、センターを見学しにきた見習生たちに胎児貯蔵室を案内したとき、発した言葉である。一読、胎児貯蔵室を現像室に、胎児の成長過程を写真のフィルムの現像過程になぞらえていることがわかる。

たしかに胎児貯蔵室は現像室の様相を示している。まず、貯蔵室は地下にあり、2枚の扉と2重に折れ曲がった廊下のおかげで、そこには日光の侵入するおそれがない。貯蔵室の内側の「蒸し暑い暗がり」「the sultry darkness」は「深紅色」「crimson」で、「夏の午後、眼を閉じたときの暗闇のよう」「like the darkness of closed eyes on a summer’s afternoon」である。胎児の状態はどうかというと、やはり写真のフィルムの現像過程を暗示する。「無数のルビー」「innumerable rubies」をちりばめたように輝く壘の中で、胎児たちは「紫色の眼」「purple eyes」をし、「狼瘡（皮膚結核）のあらゆる症状」「all the symptoms of lupus」を呈し、まるで「ぼんやりと赤い幽霊」「the dim red spectres」のようなのだ。<sup>20</sup>

胎児と写真の直喩的な類似関係——この関係を念頭に置きながら、大量生産による人間の個性の喪失を、ヴァルター・ベンヤミン Walter Benjamin が「複製技術時代の芸術作品」(1935)の中で述べた〈アウラ〉の消滅と関連づけて考察したのは、『壘の中の胎児——20世紀の生殖テクノロジー・ヴィジョン』*Babies in Bottles: Twentieth-Century Visions of Reproductive Technology* (1994)の著者スーザン・スクワイヤー Susan Squire である。

A classic essay on the modern urban street scene, Walter Benjamin’s “Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction” can help us understand the link.....between new visualization technologies and the reproductive advances that Huxley portrays in *Brave New World*. Benjamin coins the term “aura” for that quality of uniqueness possessed by the individual which is obliterated by the process

of standardized mass production, whether by photography, cinematography, industrial rationality, or Huxley's audacious new invention, Bokanovsky's Process.<sup>21</sup>

ベンヤミンは、芸術作品が技術的に複製可能となった時代に衰退していくもの、それを〈アウラ〉と名づけた。〈アウラ〉とは、芸術作品が「いま-ここ」に「一回的」にしか存在しないという、オリジナルの真正さを表す概念である。この〈アウラ〉が、「画一的な大量生産」の時代、芸術とりわけその最も現代的で先進的なジャンルである写真と映画の領域において凋落してしまったという。凋落は2つの事情に基づいている。1つは、事物を自分たちにより近づけることが現代の大衆の熱烈な関心事であること、もう1つは、あらゆる事態がもつ一回的なものを、その事態の複製を受容することにより、克服しようとする大衆の傾向である。複製技術は、複製される対象をアクチュアル化し、オリジナルの「一回性」を除去することによって、大衆の欲望を満たすのだ。<sup>22</sup>

〈アウラ〉の凋落は何も芸術の分野に限られたことではなく、それをはるかに越え、人間の領域にまで波及しようとしている。スクワイヤーの危惧は、人間の〈アウラ〉＝「唯一無二性」が、「ハクスリーの大胆な新発明」であるボカノフスキー法によって抹殺されるというものであった。そして、スクワイヤーは『すばらしい新世界』について次のように結論づけるのだ——『すばらしい新世界』は、〈アウラ〉の喪失というベンヤミンの概念に具体的な肉付けを与え、新しい生殖医療テクノロジーのために人間性の低下が出来るであろうというハクスリーの大いなる不安を表している。"Giving fleshly form to Benjamin's idea of the loss of the aura, *Brave New World* expresses Huxley's mandarin anxieties that a debased humanity would follow from new technologies of medical reproduction."<sup>23</sup>

さて、スクワイヤーのほかにも、ベンヤミンの提起した〈アウラ〉の凋

落を、人間のクローン化の問題に結びつけた論者がいる。『透きとおった悪』(1990)の著者ボードリヤール Jean Baudrillard である。ボードリヤールは、『透きとおった悪』の刊行当時、体細胞クローン羊ドリーの誕生のことなど知る由もないが、体細胞クローニングがそう遠くない将来、人間という哺乳類においても成功することを確信的に見通しながら、人間のクローン化がはらむ問題を先見的に考察しているのである。

クローン化は、それゆえ身体モデル化の歴史の最後の段階、遺伝情報の抽象的組成に還元された個人が大量生産による個性の喪失を強いられる段階である。ここで、ワルター・ベンヤミンが複製技術時代の芸術作品について述べたことを、もう一度とりあげる必要があるだろう。大量生産によって複製される作品において失われるのは、その作品のアウラ、つまり「いま、ここにしかない」という特殊な性格であり、作品の美的形態であって、この形態は、ベンヤミンによれば、複製化という避けられない運命において政治的な形態をとる。<sup>24</sup>

体細胞クローニングは、先述したように、受精卵クローニングとは異なり、親(成体)を構成する体細胞の核を取り出し、その核を、前もって核を除去した別の未受精卵に移植し、新しい個体を作り出す技術である。ドリーの場合、6歳のメス羊から取り出した乳腺細胞の核を、除核した別の羊の未受精卵に挿入し、それをさらに別の羊の子宮に移植するプロセスを経て、誕生した。ドリーは、当然、乳腺細胞を提供した6歳のメス羊と全く同じDNAを持っているものの、遺伝的な父親は存在しないし、未受精卵や子宮を提供したメス羊とも遺伝的には無関係ということになる。ドリーの誕生により、オスを必要としない母系の単性生殖が哺乳類ではじめて成立したことになるのだ。体細胞クローニングは、理論的には無限に同じDNAを持つクローンを作ることを可能にしたのである。

問題は、まず、一切の他者性の廃絶である。人間は通常、男女の偶然的



な出会いと2人の性的な関係を経て、誕生する。自己という存在は、父と母の姿を通過するのである。すでに現在、人工授精や体外受精といった生殖補助技術は、性的関係を不要にしているが、まだそこには精子と卵子の交配という事態は存在している。しかし、体細胞クローニングは、生殖という二元的行為はもちろんのこと、生殖細胞同士の結合すら無用にしてしまい、すべて他者なしですませることを可能にする。クローン人間は生殖を伴わない。父や母は確実に消滅してしまうのである——「クローン化の操作が母をラディカルなやり方で廃絶するとき、じつは父もまた廃絶され、染色体のもつれあいやそれらの差異の錯綜も廃絶されるのだ」。<sup>25</sup>クローン人間は、一切の他者性を追放しながら、無限の自己増殖を繰り返すのである。

もう1つ、全体性の終焉という問題が浮上する。身体を部品視する立場に立つと、身体は分節可能な部分に解体でき、仮にある身体部位に欠陥や欠損が生じた場合、それを人工器官に置き換えることができる。この機能主義的な発想にしたがうと、ヒトあるいは異種動物の臓器や人工臓器が、典型的な人工器官になるが、情報科学的な発想に立つと、個々の細胞に内包された遺伝情報こそ、とりわけ人工器官性を担った存在となるであろう。それは、いわば「胎児状」の人工器官であり、あらゆる機械的な人工器官よりもさらにいっそう人工的な「サイバネティックス的人工器官」だ——「身体はもはや無限に大量生産される人工器官の一種にすぎなくなろうとしている」。<sup>26</sup>身体を不可分な諸要素の集合体と見なす観点からみると、体細胞という「胎児状」の人工器官から存在の全体を作り出すことは、全体という概念それ自体の意味を喪失させてしまうのである。

ボードリヤールが指摘する、他者性の廃絶にせよ、全体性の終焉にせよ、それらを通底するのは1つの状況である。それは、一言に煎じ詰めれば、身体性の崩壊ということである。身体性の崩壊は、ボードリヤールの説明を借りると、「身体モデル化の歴史の最後の段階」に相当する。この段階に達すると、遺伝情報コードに還元される人間は、「大量生産による個

性の喪失を強えられる」のである。

もっとも、工業化時代に生きたベンヤミンは、複製技術時代の芸術作品における〈アウラ〉の凋落の理論を提起したとき、まったく同一の人間を大量生産できる、情報化時代の生殖テクノロジーまでは思い至らなかったようだ。それは、『すばらしい新世界』のハクスリーとて同様である。しかし、ハクスリーの場合、遺伝情報コードという原基からの無制限な増殖までは透視できなかったものの、大量生産の原理と生殖テクノロジーの結託が惹起する「個性の喪失」=〈アウラ〉の凋落については、確実に予見していたのである。

## 5. 「われわれはじょじょに〈壘〉の中へと取り込まれている」

クローン人間規制に関しては、現在、各国で検討が進められている。欧州主要国は1980年代から論議を積み重ね、人間の生殖技術や受精卵の扱いを規制する法律を制定し、その中でクローン人間作りも禁止している。<sup>27</sup> 日本では、科学技術庁が2000年3月、人間の体細胞の核を移植して、その人間と同じ遺伝子をもつクローン人間をつくることを禁止する「ヒトに関するクローン技術等の規制に関する法案」の骨子をまとめている。「法案」は、違反した研究者らには5年以下の懲役か500万円以下の罰金、またはその両方を科す、さらに違反者が所属する研究機関にも罰金を科すとしている。<sup>28</sup> 米国の場合、クローニングを人間に応用する研究には連邦政府予算を支出しないとの大統領令が出されたものの、それ以外の具体策はとられず、生殖技術の規制に関しては、州法にゆだねられ、州ごとにばらばらである。

ことほど左様に、クローン人間を作ることは、禁止される方向に進んでいるが、国により検討機関により相違があり、必ずしも歯止め策が世界中で歩調を合わせているとはいいがたい。いや、たとえ歯止め策が世界同時に立てられたとしても、一旦開発された技術を廃絶することがきわめて困

難である以上、歯止め策の間隙をぬってクローン人間造成を企てるやからが出現しないとは断言できないであろう。

ここには、クローニングが点火する人間の〈欲望〉と社会との関係が潜在している。それはどういうことかということ、たとえば、最愛の子供を交通事故で失った両親が、死んだ子供と瓜二つの子を再びもちたいと切望し、クローニング以外に望みをかなえる手段がないとするならば、そのとき、彼らの切なる〈欲望〉を社会的に許すべきか否かという問題である。個人の〈欲望〉がどんなに切実なものであっても、社会的には許容されない場合もあり得るからだ。しかし、個人が止むに止まれぬ〈欲望〉を抱いたとしたら、はたしてそれを社会的に許されないエゴイズムとして否定することができるであろうか。<sup>29</sup>現代の人間社会には、このような誰でも抱き得る人間の〈欲望〉を押しとどめる究極的な論理など、存在しないように思われてならない。

クローニングによって点火された人間の〈欲望〉が、反転してクローン人間造成への道を開くとき、ハクスリーの体外発生ヴィジョンを単なるSF的絵空事として一笑に付すことはできなくなるであろう。前述したように、クローン人間が時間差のある人工的な一卵性双生児にすぎず、遺伝子的に同一のコピーであっても、生きていく過程で環境因子の影響を受けるため、人格的には別人であるという主張は理解できる。しかし、だからといって、同一者の増殖に「慣れっこ」になるなどとは到底考えられない。自分の〈顔〉と同じ「60」人の他者——もしそのような事態に遭遇すれば、必ずや人間の〈アウラ〉の消滅を痛感し、存在論的不安を抱くに違いない。

「技術的およびイデオロギー的にわれわれは〈壘の中の胎児〉から遠い道のりにある。しかし、フォード暦600年（西暦2509年）までに何が起きていないかは誰にもわからない」“technically and ideologically we are still a long way from bottled babies.....But by A. F. 600, who knows what may not be happening?”<sup>30</sup>——これは『すばらしい新世界』に付けられた序文（1946）の一節である。しかし、現在の生殖革命の急激な進展を目

の当たりにするとき、ハクスリーの予測よりかなり早い時期に〈壘の中の胎児〉は実現するように思われて仕方がない。「ハクスリーの描いたヴィジョンは少しずつ現実のものに近付いているのであり、われわれはじょじょに『壘』の中へと取り込まれている」<sup>31</sup>のではなかろうか。

## 注

1. Joseph Needham, "Biology and Mr. Huxley," *Scrutiny*, May 1932, 78.
2. 体細胞クローニングと受精卵クローニングに関しては、岩崎説雄『クローンと遺伝子』（KKベストセラーズ、2000）、12-62ページなどを参照した。
3. Needham, p. 78.
4. 村上陽一郎「ヒト・クローン倫理問題の誤解——かけがえのない個別の命」（朝日新聞夕刊、2000年4月20日）。
5. 安部公房『他人の顔』（新潮文庫、1968）、20-36ページ。なお、曖昧微妙な〈顔〉を現象学の視線によって捉えるユニークな論考としては、鷲田清一『顔の現象学——見られることの権利』（講談社学術文庫、1998年）がある。
6. Aldous Huxley, *Brave New World* (1932; rpt. London: Granada, 1977), p. 15.
7. *Ibid.*, p. 18.
8. *Ibid.*
9. *Ibid.*
10. Peter Edgerly Firchow, *The End of Utopia: A Study of Aldous Huxley's Brave New World* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1984), p. 42.

実をいえば、ハクスリーが体外発生のヴィジョンを描いたのは『すばらしい新世界』が最初ではなかった。遡ること10年余り前の1921年、小説『クローム・イエロー』*Crome Yellow*の中で、それはすでにさりげなく言及されていた。第1次大戦後のある夏、さまざまなタイプの知識人を英国の片田舎のクローム邸に集め、彼らに自由奔放に議論をさせ、戦後の混迷する思想状況を小気味よく風刺するこの観念小説において、ハクスリーは、

近代科学の信奉者スコーガンという登場人物に、次のように言わせていたのである。

An impersonal generation will take the place of Nature's hideous system. In vast state incubators rows upon rows of gravid bottles will supply the world with the population it requires. [Aldous Huxley, *Crome Yellow* (1921; London: Granada, 1977), p. 27.]

「自然の忌まわしいシステム」にとって代わる「広大な国営孵化場」の中で「幾列にも並ぶ受精卵の入った壺」——これはまさに、人工孵化・条件反射センターの多胎児大量生産ヴィジョンに先行する核心的な光景だ。

『クロム・イエロー』の刊行年が1921年、『ディーダラス』の刊行年が1923年で、ハクスリーが体外発生のヴィジョンに関しホールデインの影響を受けたというのは、一見、矛盾である。しかし、オルダス・ハクスリーと兄ジュリアン・ハクスリー、ホールデインと妻シャーロット Charlotte と妹ナオミ・ミッチソン Naomi Mitchison の5人が親しい間柄にあり、彼らが性生活、避妊、母性、優生学を含めた生殖について活発に議論していたことから、この議論の最中にハクスリーがホールデインから体外発生のヴィジョンを得たと推定されている。

11. 1920年代の英国における体外発生論争に関しては、Susan Squire, *Babies in Bottles: Twentieth-Century Visions of Reproductive Technology* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1994), pp. 66-99. が詳しく論じている。なお、後続の叢書を執筆し論争に参加した著者とそのタイトルを列挙しておく、まず、ニーチェ流の父権社会の信奉者アントニー・ルドヴィッチ Anthony Ludovici の『リジストラータ、あるいは女性の未来と未来の女性』*Lysistrata, or Woman's Future and Future Woman* (1924)、生命科学の悪用を危惧した哲学者バートランド・ラッセル Bertrand Russell の『イカロス、あるいは科学の未来』*Icarus, or the Future of Science* (1924)、優生学を支持する性科学者・医師ノーマン・ヘア Norman Haire の『ヒュメナイオス、あるいは結婚の未来』*Hymen, or the Future of Marriage* (1927)、フェミニスト小説家

ヴェラ・ブリテン Vera Brittain の『アルキュオン、あるいは一夫一婦婚の未来』 *Halcyon, or the Future of Monogamy* (1929), マルクス主義を信奉した物理学者 J. D. バーナル J. D. Bernal の『世界・肉体・悪魔』 *The World, the Flesh, and the Devil: An Enquiry into the Future of the Three Enemies of the Rational Soul* (1929), そして共産主義擁護の立場から優生学的な社会変革を支持した医師エデン・ポール Eden Paul の『クロノス、あるいは家族の未来』 *Chronos, or the Future of the Family* (1930) がある。

12. J. B. S. Haldane, *Daedalus, or Science and the Future* (London: Kegan Paul, Trench, Trubner, 1924), p. 47.
13. *Ibid.*, p. 44.
14. *Ibid.*, p. 47.
15. *Ibid.*, p. 44.
16. *Ibid.*, p. 57.
17. *Ibid.*, pp. 63-64.
18. *Ibid.*, p. 65.
19. *Brave New World*, p. 20.
20. *Ibid.*, pp. 20-21.
21. Squire, *op. cit.*, p. 148.
22. ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション1——近代の意味』(浅井健二郎編訳, ちくま学芸文庫, 1995), 588-595ページ。
23. Squire, *op. cit.*, p. 149.
24. ジャン・ボードリヤール『透きとおった悪』(塚原史訳, 紀伊国屋書店, 1991), 158-159ページ。
25. *Ibid.*, p. 154.
26. *Ibid.*, p. 157.
27. 欧米の生殖技術規制法に関しては, 米本昌平『クローン羊の衝撃』(岩波書店, 1997年), 26-45ページなどを参照した。
28. 「クローン規制法に黄信号」(朝日新聞朝刊, 2000年4月28日)を参照。なお, 同記事によると, 「法案」は, 生命倫理に深くかかわる法制度を構築するには議論が不十分とのことで, 成立しないまま廃案になる可能性

があるという。

29. 池田清彦「クローン羊が開く〈欲望〉」(毎日新聞朝刊, 1997年3月16日)。
30. *Brave New World*, p. 13.
31. 飯島洋一『終末的建築症候群』(PARCO 出版, 1994年), 65ページ。

なお, 英国の新聞『インディペンダント』紙(2000年8月30日付)は, 「クローン人間もはや不可避」と題した特集記事を掲載し, 英国政府顧問ら32人の指導的科学者の過半数が, 体細胞クローン人間が20年以内に誕生するのは確実とみていると報じている。

*Synopsis*

A Loss of the Aura: Aldous Huxley's  
*Brave New World*

Shinichi Hagiwara

The aim of this paper is to demonstrate that *Brave New World* powerfully expresses Aldous Huxley's grave anxieties that Walter Benjamin's idea of the "aura" for the quality of uniqueness possessed by the individual will be obliterated by the reproductive process of standardized mass production.

This paper first examines Huxley's radical vision of embryo culture, as portrayed in the opening section of the novel: Podsnap's Technique and Bokanovsky's Process. The former refers to the method of immensely accelerating the maturation of ova, ensuring the production of at least 150 within a two-year period. The latter utilizes X-rays to trigger the process of embryo budding, which produces up to 96 identical embryos. The combination of both technologies allows one ovary to yield an average of nearly fourteen thousand embryos in 150 batches of identical twins. In the Bottling Room, each bottled embryo is placed on a conveyor belt and manipulated both chemically and environmentally, until the fetuses are "decanted" on the 267th day.

Secondly, this paper indicates the source of the scientific background of Huxley's novel. An English physiologist-geneticist J. B.



S. Haldane whose work is *Daedalus*, or *Science and the Future* may have exercised a direct influence on several important features of Huxley's future state. The very core of *Daedalus* is the potential effect of the practical applications of modern biology on human society. Ectogenesis, or gestation outside the body of a woman in an artificial womb, is one such biological invention. Here Haldane, under the disguise of a "rather stupid" Cambridge undergraduate of the 21st century, tells of the fantastic development of ectogenesis. He goes on to predict that the abolition of disease will make death a physiological event like sleep. It is evident that Haldane's image of ectogenesis is considered as a possible inspiration for Huxley's vision.

Thirdly, special attention is paid to a most striking line in the opening passage of the novel: "Embryos are like photograph film." It means that the development of embryos bears a close parallel to the photographic development process in that each is best carried on under dim light. It is Susan Squire who can convince us of the link between the disappearance of the individual uniqueness produced by Huxley's audacious new inventions and the loss of the aura addressed in Benjamin's famous essay on the modern art. The French philosopher Jean Baudrillard is another important person who takes into consideration the connection between Benjamin's idea and a debased humanity resulting from human cloning. He points out the denaturing of the human body and calls into question the totalized notion of human being.

"Technically and ideologically we are still a long way from bottled babies. But who knows what may not be happening?"—this is a passage from Huxley's foreword to *Brave New World*. To

judge from the present situation of the reproductive revolution, it would be no exaggeration to say that we may be approaching the dystopian vision of the reproductive technology embodied so forcefully in Huxley's text.